

第4回RA研究会 国際シンポジウム(平成24年9月3日 於・學士會館202号室 開催) アンケート集計結果

シンポジウム出席者 143名 内アンケート回答者 70名(全て無記名回答)

【あなたご自身について】

質問1 性別・年代・学位と現在の職種をお教え下さい。

性別	男	40
	女	12
	未記入	18

年代	1.20歳代	5
	2.30歳代	19
	3.40歳代	23
	4.50歳代	11
	5.60歳代	10
	未記入	2

学位	学士	11
	修士	16
	博士	25
	未記入	18

職種 (複数回答有り)	1.大学教員	6
	2.大学教員(任期付)	13
	3.大学職員	13
	4.大学職員(任期付)	6
	5.産学連携コーディネーター	4
	6.リサーチアドミニストレーター	24
	7.その他	8
未記入	3	

質問2 研究推進支援に関する業務に携わっていますか？(複数回答有り)

1. 外部資金申請支援	47
2. 研究費の管理執行, 研究環境整備・管理	29
3. プロジェクトの企画・運営	33
4. 産学連携, 共同研究のコーディネート	32
5. 倫理, 安全管理, 利益相反マネジメント	17
6. 知的財産管理	17
7. 国際連携支援	11
8. 技術移転	14
9. 広報, アウトリーチ活動	24
10. その他<具体的に>	9
未記入	2

具体的業務内容

- ・ 研究企画・戦略の策定支援
- ・ ベンチャーの創業相談・育成支援や地域連携(地元自治体や企業との連携)が主なミッション
- ・ 知的クラスター創成事業の事業総括・知クラの成果をもとに新事業創出・ベンチャー企業代表取締役として事業拡大
- ・ 研究線戦略室支援
- ・ 外部資金で大学の設置・研究所の管理部門
- ・ 国際産学連携推進を主務として行う
- ・ 主に病院の事業についての補助
- ・ preaward 全般
- ・ 研究以外の業務全般
- ・ 外部資金申請支援及びその説明会の開催
- ・ 契約締結支援
- ・ 大型プロジェクトの現場マネジメント
- ・ 機関申請の支援・若手研究者の研究支援・プロジェクトの評価報告書の作成等
- ・ グローバルCOEプログラムのポストアワード業務全般

【シンポジウムの内容について】

質問3 シンポジウムのGuest Lectureの感想をお聞かせ下さい(自由記述)

- ・ 具体的な例題も入っていて、実務にも役立つ内容だった。欲を言えば、少し国際共同研究のプログラムに特化していたのでURA(業務全般について)の文脈で話してほしいと感じた。
- ・ 各レクチャーが少し長すぎた気がします。もっとspecificに日本の状況に合わせて話すによりよかった。
- ・ アメリカのリサーチアドミニストレーターの実務の全体像を知るうえで有益だった。
- ・ Dr. Kulakowskiの2つ目の講演は、リサーチアドミニストレーターに関して具体的に役割、為すべきことをまとめてお話しくださったため、大変分かりやすかった。
- ・ RAの定義、業務がより明確になりました。
- ・ URAの定義から応用まで細かくご指導いただきました。同時通訳があり大変助かりました。
- ・ Kulakowski先生のご講演は、特に、URAの役割や組織的な面について非常にわかりやすくお話しいただきました。感謝申し上げます。Woods先生は、国際共同研究協力の進め方についてNSFの立場からお話し頂き、よく理解できました。
- ・ 丁度いいレベル(易しすぎず難しすぎず)だった。はじめて聞く話はなかった。
- ・ 体系的な説明で、分かりやすかった。
- ・ Guest Lecture 2を興味深く聴かせていただきました。講演時間に対して内容が豊富で、理解が及ばない部分もありましたが、大変勉強になりました。国際共同研究の事例があれば、より理解しやすかったと思います。
- ・ SRAの説明は役だった。NSF / JST のJoint Programについて理解できた。
- ・ 米のRAの状況が理解できた。
- ・ URAのモデルが身近になく実際の状況を具体的に想定できないので、講演での説明の1つ1つが起こり得ることなどは分かるが、現実の自分たちの活動と結びついた形では理解できない。
- ・ アメリカのRA及び国際共同研究がメインテーマであり、その点では理解が深まった。
- ・ 国際共同研究に関する内容は参考になった。
- ・ 日本に向けた内容で具体的なご提案と理解しました。大変勉強になりました。Woods先生のスライドのプリントがもう少し大きいと良かったと思います。
- ・ 詳細な具体的な米国RAの役割について新しい発見を得られました。
- ・ RAの教育機関が国際的に存在することを知り、有意義であった。
- ・ 大変参考になった。特にSRAの活動については、今後、日本のURA制度の維持、発展に対するヒントになると思う。
- ・ 日本のシステムの違いはあるだろうが、非常に参考になる所見が得られた。
- ・ 初めてURAの業務内容を伺いました。幅広い分野に亘って専門職として仕事されているということを順序だてて説明していただき、よく理解できました。
- ・ Guest Lecture 1について、URAに必要なスキルの詳細について具体的に知りたいと思った。(URAのステップ(シニア・ジュニア・今後URAを目指す人)毎の教育プログラムの詳細)
- ・ 全体的に非常に良い説明されていた。2つ目の講演に関しては、日本の現状に関しては早すぎるものではないかという気がした。
- ・ Collaborative Researchの話が非常に興味深かった。日本ではまだこれからだと思うが、Team Scienceの重要性について認識できた。また、国際プロジェクトの持つ様々な考慮事項は勉強になった。
- ・ SRAでも、安全管理・利益相反が重要視されていて、その話を聞いたのが、一番の収穫でした。レベル的には、私にとっては難しかったですが、有意義でした。
- ・ 講演時間が長い。URAがようやく走り始めた日本にはあてはまらなそうな話だった。
- ・ ゆっくりと丁寧に講演くださったので、随分理解できたと思う。
- ・ 広範な内容のレクチャーでしたので、時間が短かったですね。特にGuest Lecture2は。
- ・ 包括的なもので、かつ、体系的なものであり、非常にわかりやすかった。SRAの活動や、米国の国際協力研究の動向について新たな知識を得ることができ、非常に参考になった。
- ・ 興味深い内容だったが、日本にはないシステムなので、もう少し間をつなぐような話も聞けると良かったように思う。
- ・ 教育プログラムについて北米の現状をかいま見ることができ参考になった。
- ・ 体系的な話で良かった。
- ・ 概論をお話頂いたため、よくわかりました。
- ・ 教育プログラムのより具体的な内容についての説明がほしかった。
- ・ 現実のアメリカにおけるRAの活動について、また研究助成について学ばせていただきました。今後も、このような会を開いていただければと思います。
- ・ Kulakowski博士の講演は、SRAの紹介と国際共同研究の概論に留まっており、もう少し具体的な話あるとよかった。Woods教授の講演はNSFの目指す方向性、意思決定についての話をもっと聞きたかった。
- ・ 大学に関する制度等の前提が日本の大学とは違うと思うので、前提の確認をLecturerとAudienceでできたらよかったかなと思いました。

質問4 今日の内容は、期待していたものでしたか？(自由記述)

- ・ はい。ただ、SRA等組織の紹介が多かったので、もう少し一般的な大学のRA業務の事例を学びたいと感じました。
- ・ はい、NSFについてはせっかくTokyo Officeがあるので、その活用があってもよい。
- ・ 期待外れ。業務にはあまり役立たなそう。(2人回答)
- ・ はい。ただし、もっと具体的な内容、事例がほしかった。(3人回答)
- ・ 期待以上(5人回答)
- ・ 期待通り、良い内容で満足しています。(17人回答)
- ・ URAの教育プログラム作成のヒントになった。
- ・ 一般論のようでもある。半数以上が、商社が海外で取り引きする時、通常に気にしなければならない事項と同じものだと感じた。
- ・ URAの業務にまだ明るくない立場としては、やや期待外れだった。(2人回答)
- ・ アメリカと日本の国際共同研究の具体例を聞きたかった。
- ・ 「日本にはリサーチアドミニストレーターがなかった」という理解を前提とするのは米式を過剰に「まね」することに繋がるのではないかと危惧します。
- ・ 日本でのリサーチアドミニストレーション業務についての話に、もう少し時間を割いてほしかった。
- ・ NSFの業務よりも、URA業務の話を引ききたかった。
- ・ URAのキャリアパスについての話を絡めた教育プログラムの紹介があることを期待していたが……
- ・ 海外のトレーニングプログラムの実際が理解でき、有意義だった。
- ・ 国際共同研究を話題にした意図が分かりにくかった。

質問5 研究支援に関連するテーマについて、どのような海外の事例等を知りたいですか？(自由記述)

- ・ 海外の研究者の流動性。研究グループ形成がどのようなプロセス、政策で進められるのか。その過程でRAがどのように貢献できるのか。
- ・ RAのリーダー(主務レベル)の動き、業務の進め方について。
- ・ 米国の事例を調査することはよい。しかし、日本の大学の課題をより深く、掘り下げるべき。その際は、大学以外の研究機関についても見ていくべき。
- ・ 日本の大学の、または海外大学と連携しての、海外競争的資金への申請事例。
- ・ 日本-中国間の国際共同研究事例。欧州の研究機関での取り組み。
- ・ 国際共同研究を始めるに当たってのきっかけ。シーズ、及び連携相手先を見出すために、まず、URAは何をすべきかについて。
- ・ 大学トップの運営方針。ヨーロッパ等(アメリカ以外)の実態と将来の動き。
- ・ 研究シチュエーションをモデル化して事例としてまとめ、それに沿って業務の流れを辿る形で情報提供して欲しい。ある時はAケース、あるときはBケースと、講演者の経験上のバリエーションのままに業務内容を紹介し、留意事項を紹介されても、まとまりを欠くため、聞く方はついていけない。
- ・ 公的に競争資金がどの程度社会に還元されているか。その時RAがどの程度貢献したか。
- ・ 各国の大学研究者とURAの業務・責任の分担の在り方
- ・ G8の学術振興機関長会議の進捗状況。日本政府、Funding Agencyからの説明
- ・ 研究者とリサーチアドミニストレーターの関わり方や日常的なやり取り
- ・ 研究の世界的動向や、その支援方法を概観したいです
- ・ URAに関するアメリカの各大学での個別事例(組織、人数、規模、それぞれの職務内容・職責、課題など)
- ・ URA Officeの一週間……のような形で、活動の様子を具体的に知りたい
- ・ post awardで起こりうる問題とその解決の事例
- ・ 基本的なURAの業務内容と、業務ごとのエフォートの事例。URAの人材育成。
- ・ 具体的にURAが関与してプロジェクト支援した事例。プロジェクトの各進捗ステップで、URAが果たした役割
- ・ ヨーロッパでは異なる研究管理を行っている気がするのでその例を知りたい
- ・ 具体的な国際プロジェクトの企画から実行まで一連の事例について、詳細を知りたい
- ・ 知財、利益相反、安保、リスクマネジメント、コンサルタント、研究倫理、財務、会計
- ・ RAの現状・問題点。国際的な共同研究の現状と問題点。
- ・ 日本においてはコーディネーターによる産学連携・技術移転体制があるので、URAとの接続(吸収)について関心がある
- ・ 実際に行われた、アメリカにおける先駆的な取り組みについて
- ・ 外為法や生物多様性条約に対応した国際研究連携
- ・ 大学とFunding Agencyとの関係。人的ネットワークの構築方法など。
- ・ マテリアルトランスファーや産学連携共同研究で、契約締結に誰がどのように関わるか、またそのプロセス、業務フローについて

【シンポジウムの運営等について】

質問6 シンポジウムの開催時期は適切でしたか？

時期	適切	59
	不適切	3
	未記入	8

質問7 シンポジウムの時間配分(講演時間等)は適切でしたか？

時間	長い	15
	ちょうどいい	46
	短い	2
	未記入	7

質問8 シンポジウムの開催場所は適切でしたか？

場所	適切	60
	不適切	2
	未記入	8

空港からの乗り継ぎが便利で良かった

【URAに関して】

質問9 研究機関における研究支援についてご意見がありましたらご自由にお書き下さい。

- ・ 研究大学にとっては組織的な研究支援が不可欠と考える
- ・ 今日紹介にあったような海外のgrantへの応募も積極的にやるべきだと思います
- ・ 各大学で、研究支援のあり方がまだまだ定まっていない。自らも模索中
- ・ 既に業務を行っている事務職員をもっと活用すべき
- ・ スキル標準に関して、どのようなものがあるのかをもっと情報共有してほしい
- ・ 研究支援をきちんと業務として認める必要がありますね
- ・ Vice President for Research(研究担当副学長)のポジションを早く日本に導入してほしい
- ・ 大学特有のサポートの在り方、国際共同研究についても再認識できました
- ・ 大学の教員の働き方を変えていかないと、リサーチ・マネジメントの強化は難しいので、研究者、教員の側の意識改革の取り組みも必要だと考える
- ・ 産学連携も重要性があるのではないか！
- ・ 研究支援で必要だと想定されることは、大学でも研究機関でも特に大きな差があるとは思えないので、質問の趣旨が不明
- ・ 良い実績を出して、URAへの認知度を上げる必要がある
- ・ 現状、大学・企業間の共同研究について、機関が関与している割合は30%程度で、残りの70%は教員と企業が直接話して決めており機関は関与していない。この関与比率を上げるにはどうしたらいいか、方策はあるのか聞いたかった。
- ・ 研究支援がいわゆる雑務をするためのものなのか、先へつなげるための(研究を活性化させるための)ものなのか、また、こうした学内の取り組みを事務組織と共同ですすめるのかどうか、きちんと認識を統一すべき

質問10 日本のURAについて、ご意見・ご感想等がありましたらご自由にお書き下さい。

- ・ 制度の定着、人材育成には中長期的な視点が欠かせないが、「腰のすわった」取り組みになっていない印象が強い
- ・ 研究者の中での認知度が低い(学内の情報に興味をもたない研究者がいる)。各種学会等でURAの取り組みについての講演等も割り込ませてみては？
- ・ URAが職種として定着・発展するためにも、人材育成とネットワークの為の場が必要だと考えます。URA研究会に大変期待しています。
- ・ URAの人材育成と確保が課題。人材を確保するためには、キャリアアップ、キャリア形成が可能かどうか重要。特に専門人材のキャリアアップを保障するジョブローテーションを実施することは、専門人材が職種として認知されるためには必須。そのためには、人事システムを大きく変革することが求められるのではないかと。
- ・ URA間で自由に情報交換ができるSNSがあればと思います
- ・ これからの日本のURAには、ポスドクのみでなく核になる人材が必要。
- ・ 補助金の支援がなくなった後の体制をどうしていくかが重要ではないか。その必要性をどう広めていくのか「かぎ」だと思います
- ・ 皆様と一緒に日本に合った形で育てていければよいと考えます
- ・ ノウハウの共有が重要となろう
- ・ 日本においてこの人材をどのように生かすか、制度として維持できるかは大きな課題と思われる。産学CDの団体などの統一的な動きが必要と思われる。→単なる研究会のレベルから、もう少し力のある団体へ発展させる必要があると思う。
- ・ URAの有効性を広く大学・研究期間に知ってもらいたい。
- ・ URAの知名度と役割の向上をもっと図るにはどうすべきか。
- ・ URAの定義が狭くなりがち
- ・ Preawardについて定義すべきだと思う。一人材不足している。数が全く不足しており、教員の負担が大きい。現状、Preawardは教員個人が行うという考えが大勢を占めているように思われる。
- ・ URAの導入については大学の研究現場での施行状況をふまえて、継続的に取り組みを進めるべき
- ・ 結局のところ、ブームなのではないかと思う。必要なことをどう役割分担すべきかは、対象とする研究のスキームに依存する。もう少し、研究の性格をきちんとモデル化して、URAの必要性を議論した方がよいと思う。
- ・ URAのためのsocietyを早急につくるべき
- ・ URAのカバレッジ(職域)の相場が未だ定まっていないのが、悩みどころと考えます
- ・ 良い実績を出してURAの認知度を上げる
- ・ 人材育成、certificate制度が必要
- ・ 日本における取り組みはこれから本格的になろうと思う。その意味で今回のテーマと時期はよかった
- ・ URAの位置付けに関して、さらなる情報共有があると良い気がする
- ・ 特定の大学・分野に貢献する専門的なスキル以外に、ある程度ベーシックなスキルとしての研究支援もあるという印象。ベーシックな研究支援者と専門性の高いURAの共働が必要だと思われる。

【その他(自由記述)】

- ・ 国際共同研究に集中しすぎではないか。
- ・ 貴重なシンポジウムをありがとうございました。
- ・ シンポ、研究会の準備・運営お疲れ様でした。ありがとうございました。
- ・ 特にGuest Lecture 1を聞いて、「URAの役割」とされることの多くが、URA導入前から、各大学に存在する部署(知財、法務・・・)によって行われていることだと思った。今後、各大学でURAが活躍する際、これらの既存部署との密な連携とすみ分けが必須と感じた。
- ・ 総合大学と中堅大学の差が広がらないようにすることが必要ではないか。
- ・ 本日は参加させていただきまして、ありがとうございました。米国の状況の一端を窺い知る貴重な機会であったと思います。